

中国ハルビン市に在住する10代の聴覚障害児への補聴器装用に関する評価結果の分析

唐 鶴英

．問題と目的

中国では、国情などの理由によって、聴覚障害児への健康診断と補聴器の装用の普及はまだ不十分な状態である。10代になっても、補聴器を装用していない聴覚障害児が数多く存在している。今後中国では言語獲得期を過ぎた聴覚障害児への補聴器装用に関する研究が必要であると思われる。

本研究では、10代の聴覚障害児への補聴器装用に関して、以下の3点を中心に検討した。

1. 10代になってから補聴器装用を開始した場合の補聴器装用の実態や補聴効果を明らかにする。
2. 聴覚障害児本人、担当教師、保護者による補聴器装用に関する評価の一致を分析し、聴覚障害児の補聴器装用への自己評価の可能性を検討する。
3. 10代の聴覚障害児に補聴器装用後の補聴上の問題と教育上の問題を明らかにする。

．方法

1. 対象児

中国ハルビン市 D 聾学校に在籍する 12~18 歳の聴覚障害児 13 人。いずれも聴覚障害以外の障害を併せもっていない。装用耳の平均聴力レベルは 58~108dBHL，平均は 88dBHL である。そのうち 8 人は以前補聴器を使った経験があり，5 人は初めて補聴器を装用した対象児である。

2. 手続き

1) 調査方法及び調査場所

子どもへの補聴器装用に対して，補聴器装用前，装用直後 3~5 日と装用 2 ヶ月後に，子ども本人，担当教師と保護者にアンケート調査を行った。担当教師と子どもの場合は集合調査法によって学校で行った。保護者については子どもを通して家庭へアンケート用紙を

配布した。

2) 調査内容

補聴器装用前の調査項目は，子どもの個人情報，補聴器装用への希望，聞こえの様子とコミュニケーション手段に関する項目であった。補聴器装用直後及び補聴器装用 2 ヶ月後の調査項目は，補聴器の使用状況，子どもの聞こえ，発音，発話意欲，行動と態度，コミュニケーション手段，補聴器の管理，補聴器への好感度，補聴器の問題点に関する項目であった。調査対象者群によって，質問項目は異なった部分があった。

．結果と考察

1. 補聴器装用への希望

補聴器装用への希望に関する回答から，子ども本人・担当教師・保護者の多くが，補聴器装用への希望をもっていることが分かった。三者の多くが普段の家庭，あるいは学校での生活では，不便や不満足を感じたり，現状を改善したい気持ちをもっており，子ども，担当教師，保護者は補聴器装用の効果に期待をもっていることが推察される。

2. 使用状況

補聴器装用後の補聴器の使用状況に関して，子ども本人，担当教師，保護者の回答から，補聴器装用 2 ヶ月後は，装用直後より補聴器の使用率が下降した傾向が見られた。その理由として，「うるさい」，「ハウリングが起こる」ということが挙げられたことから，補聴器の問題点は，補聴器の使用状況に大きな影響をもたらすことが示唆された。

3. 聞こえ

補聴器装用後，子ども本人，担当教師，保護

者の評価により，子どもの聞こえが改善された結果となった。図1と図2のように，補聴器装用により，子どもの家庭や学校での聞こえが良くなったことから，周りの環境の認知や情報の収集などの面で役に立てられると考えられる。補聴が遅れた聴覚障害児の聞こえに補聴器装用は効果があると思われる。

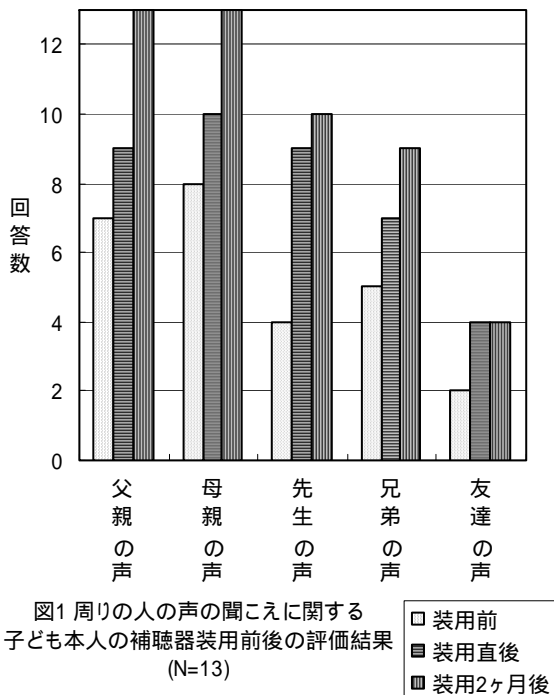


図1 周りの人の声の聞こえに関する子ども本人の補聴器装用前後の評価結果 (N=13)

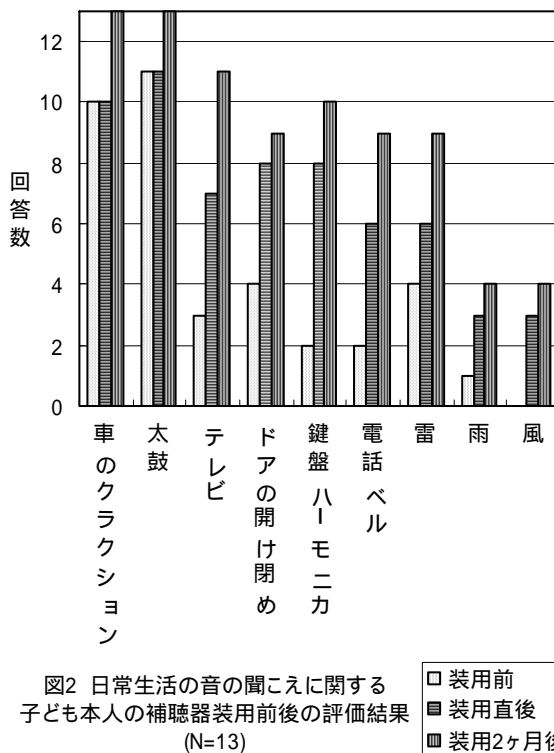


図2 日常生活の音の聞こえに関する子ども本人の補聴器装用前後の評価結果 (N=13)

4. 発音

補聴器装用後，子どもの発音が良くなったという回答がいずれも，半数以上であった。補聴器装用により，子どもの発音がある程度改善できたと思われる。補聴器装用によって，子どもの聞こえが改善され，様々な声が聞こえるようになったことが，子どもの発音にも影響をもたらしたと思われる。ただし，D聾学校には，補聴器装用と対応する発声・発音訓練プログラムが不十分であり，装用開始後2ヶ月という短期間における子どもの発音の改善の程度は限られていると推察される。

5. 発話意欲

補聴器装用後，子どもの発話意欲に対して，ある程度高まったと評価したことが分かった。補聴器装用により，子どもは聞こえがよくなり，聴覚的フィードバックにより，子どもの自発的発声・発話意欲が高まることが推察できる。また発音がある程度改善し，その影響として発話意欲も次第に高まったと推察される。

6. 補聴器の管理

子ども本人・保護者の回答により，補聴器装用後2ヶ月以内で，10代の聴覚障害児は補聴器を着ける・はずす・調節する・保管するなどの管理ができるようになると思われる。

7. コミュニケーション手段

子ども本人・保護者の回答により，補聴器装用によって子どもの音声を含むコミュニケーション手段が増えたことが明らかになった。補聴器装用の子どもの聞こえと発話にもたらした影響は，生活でのコミュニケーション手段の変化からも伺える。音声をコミュニケーション手段として加えることにより，日常生活の中のコミュニケーションをより円滑に行うことができると推察される。

8. 補聴器への好感度

補聴器装用後，補聴器への好感度に関して，子ども本人，担当教師と保護者の回答により，子どもは補聴器に対して好感をもっていることが分かった。

表1. 聴覚障害児本人, 担当教師, 保護者による補聴器装用に関する評価の二項検定結果

対象と時期		項目	希望	聞こえ	発音	発話意欲	管理	コミュニケーション手段	好感度	行動と態度	問題点
C×T	装用前		+								
	装用直後			+		+			*	*	**
	装用2ヶ月後			*						*	*
C×P	装用前		*								
	装用直後			+			*	+	**	+	*
	装用2ヶ月後			*			*	+	*	+	**
T×P	装用前		**								
	装用直後								**	+	**
	装用2ヶ月後			*	+				*	+	*

** p<.01 * p<.05 +05<p<.10 有意または有意傾向が見られない ■ 未実施項目

9. 行動と態度

補聴器装用直後と2ヶ月後の子どもの行動と態度の変化に関して, 子ども本人, 担当教師と保護者の回答では, 補聴器装用後, 子どもは「明るくなった」, または「安定した」という変化があったことが分かった。補聴器装用により, 子どもの行動と態度にプラスの影響を与えたと推察される。

10. 補聴器の問題点

補聴器装用2ヶ月後の補聴器の問題点は装用直後より, やや増えた傾向が見られた。問題点の内容は主に「うるさい」, 「ハウリングが起きる」であった。10代の聴覚障害児へ補聴器装用初期では, うるさいと感じる場合が少なくないと思われる。補聴器の補聴効果を高めるために補聴器装用後の適切な補聴面の調整, 子ども個人に合ったイヤモールドの作成, 及び子ども自身の聴覚的慣れを促すことが重要であると思われる。

11. 評価者ごとの評価結果の一致

表1に示したように, 補聴器への希望, 聞こえ, 補聴器の管理, コミュニケーション手段, 好感度, 行動と態度, 問題点の項目についての評価結果の一致群の数は有意に不一致群より多い結果になりました。以上の項目についての三者の評価結果はある程度一致してい

ることが分かった。

. まとめ

補聴器装用は, 10代の聴覚障害児の聞こえ, 発音, 発話意欲, コミュニケーション, 行動と態度の改善に効果があることが明らかになった。

10代の聴覚障害児は補聴器に関して, 補聴器への希望, 聞こえ, 補聴器の管理, コミュニケーション手段, 補聴器への好感度, 行動と態度, 補聴器の問題点などについて, 自己評価が可能であることが分かった。

補聴器装用後, 補聴器における問題点の解決及び教育的な側面での適応などについて, 不足な面がある。今後, 補聴器の使用と効果を把握し, 補聴器の問題点を明らかにするために, 継続的に評価票で調査する必要があると考えられる。またその評価票を利用することを中心とする適切な支援プログラムの開発が必要であると思われる。

文献

加藤哲則・星名信昭(2001) 保護者による聾学校小学部児童の補聴器活用の評価. 上越教育大学障害児教育実践センター紀要, 7, 17-22.

中川辰雄(1997) 補聴器装用の主観的評価: 保護者の見方と聴覚障害児の自己評価 第35回日本特殊教育学会発表論文集, 60-61.

孙金忠(2004) 中国聋儿康复工作的现状及对策. 中国特殊教育, 2, 17-20.